

インドに於ける東洋学研究

佐々木現順

41 (佐々木)

インドに於ける東洋学全分野にわたる状況については未だ発表されたものはいくつかない。一九六四年の国際東洋学者会議に於てインド側で調査したレポート (Oriental Studies in India, edited by Dandekar and Raghavan) がその最初のものであると思われる。以下、このレポートに従ひ、いくらかの私見を加えた。これはインド学を対象とする我々にとつても、自分の専門分野のインドに於ける位置付けと国際的学問方向を知る上に貴重な資料と思われる。我々の属するインド学研究も同際的水準の上でないといふ批評も研究も信頼しがたいといふ新しい状況が既に生じて来ていることは否定しがたい。但し、全インドに於ける東洋研究の分野については紙数の関係で割愛せねばならないが、前期の会議で発表された中の資料を中心とし、その抜書き

を記し、以て、国際的研究方向をうるよすがとしたい。先づインドに於て、他の諸国と著しい対照となっていることは所謂インド文化研究が殆んど各州にまたがる研究機関でなされているということである。日本で日本文化研究機関が各県に於て、これ程になされているかどうかということを考えさせられる点を持つ。ところで東洋研究について、全インド的会議は次の五種である。

All-India Oriental Conference, Poona; The Indian History Congress, Calcutta; Indian Philosophical Congress, Santiniketan; Linguistic Society of India, c/o Deccan College Research Institute, Poona; Numismatic Society of India, Varanasi.

各州にわたって分布する研究機関は三百五十三の多きに

上る。その散在する十九州はアンドラ・プラデーシュ、ビハール、デリー、ゴア、グジャラート、ヒマチャール・プラデーシュ、ケーララ、マッドヤ、プラデーシュ、マドラス、マハラシュトラ、マイソール、オリッサ、パンジャブ、ボンダイチエリー、アッサム、ラジャスターン、ウツタル・プラデーシュ、西ベンガル諸州であり、その中で、重要な研究所は主として、デリー、マドラス、マハラシュトラ、マイソール、ウツタル・プラデーシュ、西ベンガル諸州に配置せられている。

これらの研究機関の研究対象は言うまでもなく、一、ヴェーディック、サンスクリット・ブラクリット研究であるが、これに続くものとして、二、ドラヴィダイヤ、三、アラビヤ・ペルシヤ、四、言語学と現代インド諸語、五、古代・中世・現代史、六、哲学宗教、七、美術、技術、八、東南アジア、九、イラン、十、回教、十一、考古学がある。

この全体を記述することは限られた紙数の能くするところではないが、インド学界の中軸をなすヴェーダ・サンスクリット・ブラクリット研究の素描と哲学・宗教及び東南アジア研究の一部を全体の流れの上に乗せた素描とがここで記述せられるであろう。仏教学は東南アジア研究部門、而もその一部としての位置を保っているに過ぎない。インド

学界の部門配置の仕方は西欧諸国と全く同じく、従って、専門的には仏教に対する視角は東南アジア研究の一部としてである。しかし、一般的即ち哲学・宗教研究として西欧及びインドに於て仏教の占める位置は国際的であり、キリスト教と並んで重要な位置を示している。

一、ヴェーダ・サンスクリット・ブラクリット研究

数十年前のヴェーダ研究は、主として、外国学者によってなされていたが、ダンデカールの *Vedic Bibliography* (Vol. 2) の示す如く、一九四五—一九六〇年にわたるインド人学者の研究は今や、斯学の中心となって来た。殊に、マックス・ミュラーのリグヴェーダ以来、V. S. Mandala による出版即ちサーヤナのブハーシヤとリグヴェーダ・サミターはキラ・スークタを追加し、インデックスと論文を補筆し、前記のマックス・ミュラー版を一步進めたものとなっている。その他、リグヴェーダ註釈の出版は *Rgarrthadipika* と *Skandasvamin* の *bhāṣya* とを俱した出版 (*Trivandrum Sankrit Series*)、或は *Udgraha* の *bhāṣya* の一部、更に *Kapali Sastri* の新しい註釈 (*Siddhānta*) の出版等によってうけつがれている。その他、多種のサミターのマントラに対する大・小の註釈は宗教儀式の研究

に新しい分野を開いてゐる。例へば *Guṇaviṣṇu* の *Chāndogya-Mantrabhāṣya* 或は *Halāyudha* の *Brahmaṅgasarvasva* などがそれである。特に、重要な発見は *D. M. Bhattacharya* の *Paipalāda-Samhitā* の貝葉が、オリッサ・プーリー地方の *Vasudebpur* で発見せられたことである。これは従来、所謂カシミールから出たアタルブヴェーダの外に *Paipalāda* 学派が各地で盛んであり、グジャラート・ウトカラにひそがっていたことも相定せられる資料ともなるものである。近來出版された中で、ジャイミンニー・ブラーフマナがあり、ラグフ・ヴィーラとチャンドラ・ローケシュによって最初の完本の出版となつて現れた。

スートラ研究はゲークワード・シリーズ *Dhūrtasvāmin* の註と共に出された *Apastamba-śrautasūtra* と *Rāmāṅgāra* の *vyāhi* のある同スートラ (マインソール・オリエンタル・シリーズ) とを初めとして *Van Gelder* 校訂の *Mānavya-śrautasūtra* 及び *Sāṅkhāyana-śrauta-sūtra* の *Caland* の英訳とローケシュの文法的研究を補促した著作、その他、既刊テキストは熟知されているから割愛するが、未既刊のものには *Bharadvāja-śrautasūtra* と、その英訳と訳者註とは *C. G. Kashikar* による既にブーナで印刷せられたばかり、大體それと *Vaidika-pādānukramakośa* (*A Vedic*

Word Concordance) は約五〇〇のヴェーディック・テキストについて、語源・テキスト研究・アクセント等の研究を入れた総合的研究であつて、*Vishveshvarananda Vedic Research Institute of Hoshiarpur* から出版が期せられてゐる。

これらヴェーダ研究の上で気付くことは第一にリグヴェーダ、サミーターが原典批判を必要として来たこと、第二にダンデカール氏の指摘する如く、ヴェーダ解釈に対するバーニニー文法の必要性が認識せられて来たこと、第三には、新しい訳業が逐行せられて来たことである。新しい訳としては *Velankar*, *Bhawe* のリグヴェーダの訳及び特にこの点では、ブーナの *Vaidika Saṁśodhana Maṅḍala* が、数年間に行つてゐる *Śrautakośa* 出版事業に注目すべきである。そのサンスクリット部門は、一巻を出し英語部門はそれに応じて二巻を一九五八—一九六二の間に出版してゐる。次に、ニルクタについては *B. Bhattacharya* の *Yask's Nirukta and the Science of Etymology* があり、ヤースカ以前の語源論を論じてゐる。更に、語源に関して注目すべき作品として *F. Singh*, *The Vedic Etymology*; *Suryakanta*, *A Grammatical Dictionary of Sanskrit (Vedic)*; *A. M. Ghattage*, *Historical Linguistics and Indo-Aryan*

Languages 等がある。又、外来語の研究も盛んで、これに就いて K. Raja は「古代インド言語学者は主として言語の主な意義に注意し、言語に於けるメタフォリカルな転移について充分には理解を向けていない」と述べていることをダンデカールは注意している (Oriental Studies, 1964, p. 8, ed. 26 th I. C. O.)。次に、ヴェーデーック哲学はウパニシャッド哲学を内含するが、近来この方面では Mukhopadhyaya, Studies in the Upanisads; Chattopadhyaya, The Teachings of the Upanisads 等があり、特に、仏教心理学の研究に就いて有益なものは Chennakesavan, The Concept of Mind in Indian Philosophy であり、彼はここでは、認識過程についてインド哲学の本質を説明している。ヴェーダとプラナーナとの思想的交渉を取扱った異色あるものとして P. L. Bhargava, India in the Vedic Age をあげることが出来る。次にヴェーデーック以後のサンスクリット文献研究で、最初にあげねばならないのは、バンドールカル東洋研究所のマハーバーラタとハリヴンサの編集事業と、バローダ東洋研究所のラーマヤナの原典出版事業であろう。前者の研究所から出された出版物は、今まで学術誌 (ABORD) 四二巻、サンスクリット・プラクティック八十五巻・Descriptive Catalogue of Govt. Mss. が一八

巻、マハーバーラタ十九巻その他 Govt. Oriental Series; Bhandarkar Oriental Series の多数を持つ。後者のバローダ研究所は B. J. Sandesara 所長の下でサンスクリット一六五冊、英文五五、アパブフラインシャニ、ベルシャニ、グジャラティニ、アラビヤニ、プラクリット一、マラティ・ヒンディー六二冊、一九一五年に発刊したゲークワード、オリエンタル・シリーズ及び斯界で最も權威ある学術誌として Journal of the Oriental Institute を出し、更に一九五一年以後始められた Vālmiki Rāmāyaṇa の大事業には毎日、三十名の協力者が従事している。

インドに於けるマヌスクリプト出版事業について特記すべきことは、これに政府の強力なる支持があることである。政府の Sanskrit Commission (1956-57) が既に発表したところの原典に関する性質・取扱いの範囲に関する綱領を基礎として行われている。次の諸研究機関がそれに属しインドの中心母体となっている。この計画はインドのみで他の諸国では殆んど見られない。中核をなす機関は次の如くである。

Oriental Institute, Baroda; the Bhandarkar Institute of Poona; the Bharatīya Vidyā Bhavan of Bombay; the International Academy of Indian Culture, Delhi;

the Oriental Manuscript Libraries of Madras, Mysore, Triyandrum ; the Rajasthana Purātattva Mandira, Jodhpur ; the Prakrit Text Society ; the Bharatiya Jnanapeetha ; the Jaina Samskṛiti-Samiraksaka Saṅgha of Sholapur.

更に、政府の支持は the University Grants Commission, the Indology Committee, the Central Sanskrit Board といふ組織となつて、諸大学のサンスクリット・プラクリット・シリーズを援助している。この方面で優れたカタログとして V. Raghavan, (Madras) の New Catalogus Catalogorum があり、その第二巻は a, au までふくみ、印刷中であり、又、ジャイナでは Velankar の Jinaratna-kośa が企画されている。その第一巻は一九四四年、インドカル研究所から出版されている。

これらの原典出版は哲学・文学の分野で貢献しているのみではなく、歴史的にサンスクリット文献の伝統の多様性が明るみに出たという点で重要である。何故なれば、従来、インド文化の伝統は古代・中世以後に於て断絶し現代インドにつらならないということが、インドの現代の歴史家の間にさえ指摘せられている現状の下では特に重要な意義をも持つと思われるからである。その一例は V. Raghavan

校訂 Anandarāṅga-Campū (Śrinivāsa 作) の出版であり、それは十八世紀ボンディチェリーのフランシスの Dubhash, Anandarāṅga Pillai の生涯及び他の資料ではえられなかつた同時代の史実を明らかにした。その他、一六八四—一七一〇年にタンジールを支配した Shahji の伝記は Raghavan 校訂の Śahendra-Vilāsa (Śrīdhara-Venkateśa 作) で示され、地域史の方面を明らかにしたものとついで、マドラスを中心とした Rājāvinoda-Mahākāvya (Udayarāja 作) 等の作品が数多くあげられる。かくてマンスクリット出版は現代インド文化と古代文化との空白と想像された歴史を充足せしむる大きな歴史的価値をもになっている。

プラクリット研究は一時、インド学の傍系的分野であったが、現在は幸にしてその研究は著しく増大して来た。特に、この方面では、ジャイナ学者によるプラクリット・テキストの出版が目立っている。これにも政府の支持をえた Prakrit Text Society (一九五三年設立) があり、これに協力するものとして、Institute for Prakrits and Jainology, Vaiśālī (1955) と Bharatiya Samskṛiti Vidya Mandira, Ahmedabad (1957) の設立以来の機関があげられる。その他 Caṅpannamahāpurisacarīya の出版も注意すべく、例えばその中で、ローマチャンドラによって引かれた重要

な典拠として *Trisastiśalākāpurusa-carita* がある。その他数十種の中、文学に関するものはラクリットとして *Uḍḍiye* 校訂の、三つの *śaṭṭakas* (*Candralēkhā*, *Anandasundarī*, *Śṛṅgaramaṇījarī*) をあげておく。ラクリット以外であるが、文学の方面で異色あるものは K. K. Raja, *The Contribution of Kerala to Sanskrit Literature* である。

これは文学のみでなく、その地域的特色を強調したものである。従来は古典時代を中心としたものと相違している。この方面で、特にレトリックやドラマに関するエンサイクロペディックな作品としては *Raghavan* の *Bhoja* の *Śṛṅgaraprakāśa* (*Madras*, 1963) なる大論文が話題となっている。辞書編集事業として、最もすぐれた企画の一つは、ブーナのデッカン大学研究所の *Dictionary of Sanskrit on Historical Principles* である。それはウェーダより十八世紀に至る約二千のテキストを網羅し全部で二十巻・各巻千二百〇〇頁がふくまれると期待されている。序に、一八九〇年のブーナの *Practical Skt-Engl. Dictionary* の改訂増補版が熟知の如くブーナより近刊された (*prasād prakāśan, poona*, 1957-59) ところを記しておく。

以上の古典研究の外に現代インドの国際的地位という点から見て重要な研究方向は社会科学に関する研究の進歩で

ある。この傾向は我国に於て漸く注意されるに至った現代インド社会研究にとって示唆的である。この分野に於ても又、インドは先ず古文獻の出版と研究に支えられている。多くのテキストの中で *Lakṣmīdhara* の *Kṛtyakalpataru* があり、十四巻にわたる大作が、マローダのゲークワーズ・シリーズに続けられている。ダルマシャーストラのダイゼストたる *Madanaratnapradīpa*, *Tadarānanda*, *Mādanamahārṇava* がある。更に *Kautilya Arthasāstra* (Vol. 1, 1960) が R. P. Kangle の校訂で、ボンベイ大学から出ている。又、アルトハ・シャーストラの断簡と註釈は、*Muni Jinavijaya* により *Bharatiya Vidya Bhavan* (1961) より出で、政治行政に関し、*Kṣemendra* に帰せられる *Nīṭīkalpataru* は V. P. Mahajan により出版されている。原典出版以外の個人の研究資料としては先ず B. K. Ghosh の *Hindu Ideal of Life* がある。これは前記諸原典即ち *Gīhasūtras*, *Srautasūtras*, *Dharmaśāstras*, *Arthasāstra*, *Kamaśūtra* に含まれている課題を取扱う。R. Aiyengar の *Some Aspects of Hindu View according to Dharmaśāstra* は、社会的政治的倫理の根柢に関し、文獻的典拠を与えている。後者は V. P. Varma の好著 *Studies in Hindu Political Thought and its Metaphysical Foundations* である。

同一趣旨のものである。Varma の近代的見地からの古代インド政治理念の分析は、斯界の異色である。インド社会学研究全般の方向を見る一資料としては The Society in India (Madras, 1956) があり、マドラス社会学会主催になる会議の報告である。一般的傾向としてインド社会の根本をなしているカーストに対して、従来なされた西欧人の研究が全面的に批判されて来ている。たとえば、スードラの形成がアフリヤンのみでなく、他のトライブとの関係によっても形成される点を強調したものに R. S. Sharma, Śūdrar in Ancient India がある。同様な意図に D. D. Kosambi は Brahmin・Kshatriya の始源を論じ、Kshatriya、システムが古代に存せないと論じている (JBRAS 26, Oriental Studies)。現代インドの社会問題となつてくる精神病の増加は世界に共通の問題であるが、特にインドでは社会的状況の外に家族制度の影響が著しい。従つてそれに関連したカーストと家族の研究が進められている。男女を原理的にとらえて神とする古代思想については多くの歴史家が叙述して来た。V. S. Agrawala, The Glorification of the Great Goddess が Devi-Mahānyam の研究として、プラーナに見える女性の位置を評価し、更にこれが現代の問題にまで及び Kapila, Marriage and Family in India

はホリガン、ホリアンドリーの問題をまひかり、Rama-krishna Mission は Great Women of India に於いて、サーマ時代より現代に及び女性の位置を述べ、Sakuntala Rao Sastri の Women in the Vedic Age の Women in the Sacred Laws もこの部類に属する。かかる家族主義の中心をなす女性の位置の評価を家族制度の良き点が同時に病的な社会現象の一つの根柢的理由でもあるとする社会学者の見方も注意せられる。例えば A. A. Khatri, Social Change in the Hindu Family and its Possible Impact on Mental Health, Journal of Gujarat University, March 1963, pp. 67-68.) がそれである。その他、教育、政治、法律に関するものでは、次の如きものがある。D. C. Das Gupta, Educational Psychology of the Ancient Hindus; R. S. Sharma, Aspects of Political Ideas and Institutions in Ancient India; S. Varadachariar, The Hindu Judicial System 等である。特に注意すべきは、一九三〇—一九六二年の間に五巻六・五〇〇頁として完成せられた Kane, History of Dharmasāstra (Bhandarkar O. R. Inst. Poona) は古代及び中世インドの宗教・市民法に関する最も権威あり且つ広範囲にわたる斯界の一大モニュメントに備する業績である。特に仏教学にとつても興味ある叙述は第五巻に

あり、そのついで Karma, kala, vratas の哲学的課題と共に Tantra, Purāṇa とダルマ・シャーストラとの関係が取扱われ、仏教的意味にのみ限定されて用ひられている諸概念の哲学的・社会学的背景を知る重要な資料をも提供している。以上の社会科学及び歴史学研究を通観して言えることは従来、古代・中世に限られていた如き研究が漸くその領域を現代社会研究にまで広がり、或はそれとの関係がインド人学者自らの手によって進められて来たということである。然し、なおそこにインド文化史学者に共通な伝統が強く残っていることを見出す。それは歴史の解釈が記録的であり、宗教的観念的であるという点である。現代史から見て、更に求められる要請は仏教の始源、そののアジアに於ける傳承の理由、社会的環境と時代との関係等であり、これらのことを明らかにすることによって人類の進歩への貢献も意味を持って来るであろう。この点で、マルクス主義者に転向した Ruben の幾多のインド史研究の業績は注意すべきである。彼は勿論、理念に重点をおかぬとしても、例えば、経済生活に於ける Gernet、或は唐時代に於ける仏教寺院の経済的背景の研究等は仏教生活及びその歴史の意義に新しい脚光をあてるものと考えられる。このことの反省が既に一部進歩的インド人学者の間に擡頭して来たことは、永く

精神史或は古典のみの歴史研究に没頭して来たインドの東洋研究の上に見られる進歩的傾向である。仏教がアジア各地に広がったのは単に精神的観念論或は強力な思想体系の故のみではないであらう。その背後にはこれを支えた経済的物質的諸要素の結合があったに違いない。かうした問題に歴史的科学的解答を与えることが要求せられる。そういう操作によって仏教の伝播のみでなく、インドのヒンドウイズムが何故に東南アジア及び極東に広がって行かなかつたかというヒンドウイズムの持つ national racial consciousness の基盤をも明らかにされるであろう。

二、東南アジア研究

この研究はインドの国際的立場からして当然、現代的要請にもあっている。その解決のために先ず従来行はれて来た歴史的研究が重視せられる。何故なれば、インド古代史研究に捧げたインド人学者の歴史研究の方法論がそのまま東南アジア研究にも用いられているからである。一九四七年以後の研究は、多く自国インド文化圏として東南アジアを眺めていたことを示している。殊に、インド人学者でモン・クメールとチャーンの言語グループを研究した者はいない。この研究のアンバランスは、しかし、インド政府と

University Grants Commission とが各大学にその研究資料とその便宜を恵んだことによつて今後の斯学の發達が期待出来る。一 般の特色付けとして R. C. Majumdr, Maharāja Sayajiro Gaekward Honorarium Lectures for 1953-54 があり、東南アジアのインド文化圏としての言語・宗教との連関で關心を集めてゐる学者は P. V. Bapat であり、彼はビルマ・カンボジャ・タイ・セイロンに於ける仏教諸派を調査し、又、政府からの 2500 Years of Buddhism (1956) を編集し出版した。本書は好評を博し、一九六五年六月改訂された第二版が出された。これはヒンターランドの Hindu Colonies in Far East (1963) と共にインド文化傳播の研究を基本モチーフとしたもの。同様のものには次の業績がある。K. A. Nilakanta Sastri, South Indian Influences in the Far East; K. Nag, Discovery of Asia; K. Nag, Greater India; Sadananda, Hindu Culture in Greater India 等。又、論文では B. C. Chabra, "Eastward Expansion of Aryan Culture (Aryan Path, Nov. 1953); R. N. Dandekar, "India's Cultural Outposts" (March of India, viii, 1955) 等。又、言語学の分野では P. V. Bapat, "Words of Sanskrit Origin in

the Languages of South-East Asia" (I-AC, ix, 1960); A. Anjaneyulu's, "Tamil Words in Indonesian and Malay Languages" (Tamil Culture, ix, 1961) 等が東南アジアの一般文化研究に關するものがある。地域別にすれば、先ず、セイロンに關して M. V. Kihle, Location of Lanikā を筆頭にセイロンが Lanikā と Sinhala との同一名と呼ばれてゐたことの論及が近來、インド學者に特に取上げられてゐる。S. B. Choudhury は IHQ, 27 (1951) に於つてこれに關する諸説を分析し、Buddhaprakasha Raksasadvipa をセイロンとつう名と同視し、その他の名即ち Saitan, Ceylon, Sinhala など或る古典語に基付き、その他の異名がジャラ語 sela (a gem) であるとする想定をたつてゐる (Journal of the Greater India Society, Calcutta: xvii, 1958)。その他の研究の方向はインド・セイロンの文化史に集中されてゐる。現代セイロン研究はインド人學者の「極めつけられた」かなれつうな。セイロン歴史に於ける王朝史を中心とするものでは、Nilakanta Sastri, "Vijayabāhu I, the Liberator of Lanikā" (JRAS, iv, 1954); N. Sastri, "Parākramabāhu and South India" (Ceylon Historical Journal, iv, 1954-55); B. C. Law, "The Life of Parākramabāhu I." (Ibid.) 等がそれだ

50. 文化的に現代に關係する課題として M. Ghosh, "The Sinhalese Dances and the Indian Nāṭya" (Indo-Asian Culture, New Delhi: i, 1952) の小論頂があるべからう。現代セイロンに關する著書としては殆んど存しない。

ゴルト・ペロー・タイ・カンボジアに於ける研究はインド人学者はインド文化のこれらの古代・中世文化への影響をこの間に重点を置かう。ゴルト研究家として Nihar Ranjan Ray が、既に Brahmanical Gods in Burma (1932), Sanskrit Buddhism in Burma (1935), Theravāda Buddhism in Burma (1946) 等の著書を持ち、更に最近、ヤルグのビルマ彫像の研究をなした (1956)。そこで彼はビルマの美術の伝統が南インドのマンディラ・プラン派或は東インドの後期グプタから来ていると論じている。ビルマの仏教史、特に仏音をめぐる仏教興隆史の問題になつてはタトン(拙著「仏教心理学の研究」参照)については、タトンとインドのオリッサとの美術的視点からその關係を指摘していることは興味深い。ビルマの考古学、芸術についてのインド人学者の研究は極めて少くない。政治史に於ても D. N. Ray が Role of Indians in Ancient Burmese History (Prabuddha Bharata, 1952) と題して

三種の論文を出した外、W. S. Desai が Pageant of Burmese History, 1961, pp. 314 にビルマの政治史を叙述したものと及びその他若干の論項があるのみである。ペローに於てはやはり斯界の権威 Nilakanta Sastri の研究が重なる。即ち、彼の Takuapa and its Tamil Inscription (JARS, xxii, 1949) 及び「その他」インド史学者 R. C. Majumdar, Overseas Expeditions of King Rājendra Cola (Artibus Asiae, 24, 1961) 及び若干の論項は、タイの歴史・文化に於ても、その論項は貧しい。美術研究に限り、その感がある。例へば B. C. Chhabra, "Bangkok Museum Stone Inscription of Mahendrarvarman" (Journal of the Siam Society, 59, 1961); P. C. Dasgupta, "Origin of Thai Art", Modern Review, 86, 1949) であり、インド・タイの文化的交渉に於ては P. C. Dasgupta, "Cultural Affinity between India and Siam" (JGIS, xvii, 1958); "Buddhism in Thailand" (Modern Review, 88, 1950) などが、過なう。むしろ東南アジアではカンボジア・チャンバ・ラオスが比較的多く研究の対象になつてゐる。古典の研究では先ず R. C. Majumdar, Inscriptions of Kamboja, 1953 をあげべしとが出来ぬ。これは一九三種のサンسكريット刻文研究と

クメール文化史を附加したもので、刻文の研究がインド人学者による主とした研究分野となっている。その二、三を挙げて、K. K. Sarkar, "Earliest Inscription of Indo-China" (Sino-Indian Studies, v, pt. ii, Santinketan, 1956);

K. Bhattacharya, "Precisions sur la Paleographie de l'inscription die de Vo-canh" (Artibus Asiae, xxiv, 1961) 等がある。仏教との関係については B. N. Puri, "Buddhism in Ancient Kambujadesa" (HQ, 32, 1956) が、古代より十一世紀までの刻文を取扱っている。本稿に於て興味を中心となっている社会・経済・政治研究の分野で見ると、B. N. Puri の一連の諸論項即ち "Administrative System of the Kambuja Rulers"; "Some Aspects of Social Life in Ancient Kambuja"; "Bhavavarmam I and the Conquest of Funan" (JGIS, xv, 1956); "Economic Data from Kambuja Records" (QJMS, 47, 1956) などは、メール文化研究家 B. R. Chatterji, "Recent Advances in South-East Asian Studies: Indo-China" (Quarterly Journal of the Indian School of International Studies, 1959) が好導する資料である。同氏又、"A Current Tradition among the Khambojas of North India

relating to the Khmers of Cambodia" (Artibus Asiae, 24, 1961) に於て、インドのカーマリー族が、カンボジアのクメールの先祖であろうと論じている。

以上の諸國の研究より一層、現代インド学界が世界に貢献している東南アジア研究分野は、インドネシア即ちジャワ・ボルネオ研究である。この方面の研究は以上の諸國とちがって、インドに多くの資料が集められているという現実からして当然、斯界の高い水準を代表するインド学界を形成するに至った。先ず資料の点については、筆者が第一回目に在印した一九五四—五六年、故 Raghunatha Virra 博士の好意をえたが、その時、博士によって集め始めた老大な資料がその先駆をなしていると考える。それ以前、インドネシアの博士の興味と研究への情熱は、現代インドのインドネシア研究成果の基礎となっている。このことは筆者の第二回目に在印した一九六三年—四年に見たデリーにある故博士の International Academy of Indian Culture の資料の増加とその海外学者との協力研究の現実によって確かめられた。特に、依然よりこの研究所に協力していたライデンの Gonda、ドイツの故 Nobel 及び Alsdorf 或は Ham Hofmann 等の諸博士の貢献によるところが多い。元来、インド人学者のドイツ人に対する研究上の信頼は極

めて厚い。インドに於けるドゥイーン学界に対する信頼と評価は絶対であるとして過言ではなす。この研究所から出されたものの若干をあげれば次の如きものである。文法に關するものには Svarayañjana (1956) を出し、続けて二十種類のサンسكريット・シメローカのジャワ語テキスト、同じくサンسكريットのフヌシメトウフ・スタンザからなるジャワ語テキスト等が相ついでいる。更に準備されているものとして Pitrpuja Texts from Bali, Kawi Rāmāyana, Balinese Worship Manuals, Chandak-Kirana, Bhuvana-sanksepa がある。ジャワ研究の方向は主として、ジャワに伝わるテキスト及び慣習のインドへの跡付けに向けられている。即ち以上の著者の外、論項として D. K. Biswas, “Sūrya and Śiva” (HQ, xxiv, 1948); A Further Note on the Indian “Prototype of the Javanese Kūṭa-mantra” があり、Kūṭa-mantra と Saura と Agnipurāṇa と跡付けられている。ジャワの建築・美術に關する學者として H. B. Sarkar; N. Venkataramanayya, C. Krishna Gairola, J. B. Bhushan, K. Radhakrishnan, C. Sivaramamurti 等がある。特に Sivaramamurti と Le Stupa du Barabudur の著者として名高い。ホルネオに關するインド學者の貢獻も著しく、B. C. Chhabra の一九四〇年發足の Yūpa

Inscription 出版 “Nilakanta Sasri, A Note on Sambas Find” (JRAS, Malayan Branch, xxii, 1949) 及び最近出た B. R. Chatterji の “Recent Advances in South-East Asian Studies: Indonesia” (Quarterly Journal of the Indian School of International Studies, July, 1959) がある。その他の多くの業績は今の記述で尽くせるものではないから割愛するが、要するに東南アジア研究に於て、インドは質的に國際的水準の最高レベルをゆき、量的にはラダフ・ヴェーラ博士の努力によるコレクションが一つの大きな推進力となったということは疑う余地もない。

三、東アジア研究

それは主として仏教文化に關するものが中心となつてゐる。しかし、この分野は國際的に重要であるにもかかわらず、インド東洋学全体から見れば、東南アジア研究に次ぐ程度の學問的地位しか占めていない。ここに極東といったのは中国・チベット・シンキヤング・モンゴリア・コリア・日本・ヴェトナムの一部を指す。

さて、この方面の研究は政治的には、インド独立後、初めて著しく関心を引くに至つたもので、原典出版以外、インドとしては新しい研究分野と言つてよい。即ち、インド

学者、例へば Sarat Chandra Das 及び Satish Chandra Vidyabhusan 等が中印文化交流に興味を持ちはじめたのは、十九世紀末葉になってからであった。この方面では一九一八年に、カルカッタ大学が大学院で中国語及び文学を講じたのが初めてであり、後、バグチが副総長ムケールジの公の支援で、ハノイ、日本、フランスで研究に従事し、続いて、一九二一年サテインケートン大学が設立され、外国人学者即ち、レヴィー・トゥッチ・リーベンタール・グットリッチ等がこの大学に協力した。一九三七年の中国研究所 (Cheena-Bhavan) 設立以来、サンチケートンの研究所は極東研究へと一層成長して行った。以上のやうに、インドの東アジア研究は最近に開始せられたが、一四四七年のインド独立を機として、アジア文化圏の民族文化研究の必要性とそれとのインド文化の関係が興味を中心となった。この政治的必要性から始つた研究は先づ一般及び学術雑誌の出版によって促進されていることは興味がある。何故なれば、社会の現実に対する研究は古典文化の研究との間に顕著な隔りがあり、特に、インドの如き、政治的理由から古典のみに従事せざるをえなかつた諸学者にとつて現実問題の研究発表は従来と全く企劃を異にした発表機関を要したからである。而も当時のインドにあつては知識層

は一般に限定せられ、古典学者か或は政治家以外、中間の知識階級は存していなかつた。この学問的セクタリアニズムは現代インド社会の中産階級の弱さと一脈を通じた歴史的現実であつた。従つて、急に増大せざるをえなかつた現実問題研究は、古典学者の歴史的観点に立つ現実の叙述が或は極端に現実のみの皮相な反撥的叙述によつて屢々埋められていた。このやうな新旧両方向の雑誌としては *India Quarterly* (New Delhi, 1944), *Marg* (Bombay, 1947), *United Asia* (Bombay, 1947) 等があり、これらは主として、アジアの政治・経済・社会問題の叙述と現地報告に過ぎないものであつた。その有名な筆者として、我々は S. Radhakrishnan, S. K. Chatterji, P. S. Lokanathan, K. M. Panikkar, Nilakanta Sastri, J. Nehru, K. P. S. Menon, M. N. Roy 等をあげることが出来る。我々はこの方向を現実問題の研究と名づけることが出来る。第二の方向としては、前述せし如き古典学者による現実問題の歴史的文化的的研究である。この方面に於けるインド学者の業績と貢献は大きく、又、質的に国際的諸学術雑誌に光彩を放ち続けている。我々は、古典に専心しつつも更に一步を進めようとしてゐる、古典研究者の持つ民族主義と熱情とに敬意を表わさねばならない。但し、古典と現実との *textual* と

contextual との両面の統合は至難であった。往々にして、そこに極東政治に対する反動的表現と意志が見られた。インド古典と現実との総合的研究に就て、学問的にはそこに研究方法論の樹立が未だなされていない。この方法論の問題は必ずしもインドに限られない。国際的にも一般にインド研究が古典の原典研究に限られており、現実社会の研究が看過されている傾向の見られると同じである。従ってこれは世界インド学共通の問題である。この古典の textual な方法とその背景となった現実社会の contextual な方法との探究をとりあげたものとして、シカゴ大学のジנגガー教授の一編の論項は注目に価する (Milton Singer, "Text and Context in the Study of Religion and Social Change in India." Second Conference, The Frank Weil Institute, Cincinnati; 1961)。この論項で彼は特定の学派にしか存しなかった古典学とその出来た一般的背景としての社会・文化一般との相補的關係を具体的に論究し、又、学派に限定された原典を一般化せんとする危険を指適し、古典研究が現実社会の研究によって、其の理解の深まる所以を開示した。この点で、インドの現実問題研究にも重要な新しい方法論を提起している。

仏教研究に於てもまたインドの政治的背景が大きな影響

を与えている。独立後、インド文化と仏教の比較研究或はインドに於て見失なわれた資料を多く蔵しているチベット・中国・中央アジア・ネパール・南方仏教の諸研究が著しい進歩を示して来た。その諸大学は古くはサンティニケータン・カルカッタ・アラハバッド・ブリーナのみでなく、新しく、デリー、ベナレス・ウトカール等の諸大学に拡大されていった。更に又、研究所も言語学、歴史学を通じて仏教への近接さを示し始めた。その中で、先に開説した研究所として、International Academy of Indian Culture がある。これはラグフ・ヴィーラ博士によって、ナグプールに於て設立され、現在、ローケッシュにうけつがれ、デリーに移った研究機関だが、教育よりもむしろ諸出版物 (チベット・モンゴル・中国・東南アジア) に重点をおき、チベット人数名を宿泊せしめて最も多くの原典を出版しつつある。主として仏教に関係ある分野で近年活躍したインド人学者の中には次の如き人々が代表として上げられる。即ち、P. V. Bapat; 故 V. Bhattacharya; Shanti Bhikku, Lakesh Chandra, Sujit Mukherji, P. Pradhan, 故 Rahul San-kriyayana, N. Aiyaswami Sastri, Sutrangan Sen, K. Venkataraman, V. V. Gokhale 等である。特にコーカーンとローサンビーの Subhasita-ratna-koşa は注意すべき労

作であり、これについては曾って(一九一二年)トーマスが *Bibliotheca Indica* で *Kaṇḍavacanasūcya* という題下に於てその断簡を出版したが、その完全な形態を与えたのが前者である。これは一・七三八節なる佳句集であつて、作者 *Vidyakara* は十一世紀頃の人と想像せられた仏教徒であつた。これは仏教に限られたものではなく、サンスクリット文学に関し、それを歴史的観点より扱っている。しかし、当時の生活と思想のインド的背景を仏教徒の目でとらえたものであつて、仏教的社会的にも興味を引く。又、*パバット*の多年の苦勞による *Vimuktimārga-dhutaḡuna-nirdeśa* が *Delhi University Studies No. 1* として出た(1964)。これは *チベット*校訂及び英訳と二編の論文を附加した研究で前に筆者が校訂し、日本で出した拙著「*ウパティッサ解脱道論*」(1958)と同一原本である。後者に於て私は七本を対照校訂に和訳と *ペーリ* 原典との対照研究を附加したが、*パバット*の校訂本には北京版と *ミンヘン* 版が加へられていない。しかし、その序文は有益な研究を提供している。*パバット*校訂本と筆者の「*解脱道論*」と両者あいまつて、*チベット*につたえられたまきれない文献の一つとして注意したい資料となることを期したい。

仏教に関しては、最近、デリー大学とベナレス大学に *ペーリ*及びサンスクリット仏教科が設けられ、更にインド政府と *ビハール*州の支援で *デバナガリー*の *ペーリ*約四十巻及びサンスクリット原典(約二十五巻)の出版物がそれぞれ出版される。前者は *Nava-Nālanda Pāli Institute*、後者は *Mithila Sanskrit Institute*, *Darbhanga* より出されている。*ビハール*の *K. P. Jayaswal Institute*, *Patna* は *ラーフラ*、サンスクリット *ヤーヤナ*の努力で、*チベット*発見の資料を相ついで出していることは熟知の如くである。即ち、*Dharmakīrti*, *Pramānavārttika*; *Durvaka*, *Dharmot-tarapradīpa*; *Vasubandhu*, *Abhidharmakośabhāṣya*; *Pramānavārttikabhāṣya* 等の外、新しく一九五七年には *Ratnakīrtimbandhāvahī* (ed. A. L. Thakur) が出た。*ラトナキール*テイの論理学に関する三原典即ち、*Apoḥasiddhi*; *Kṣāṇabhāṅgasiddhi* の二分冊が一九一〇年 *ビプリオテーク・イン* *デイカ*の中に収められている。更にその七分冊が *タクル*によって校訂せられている。*ラトナキール*テイの重要な特色の一つが、彼が諸引用を *Trilocana*, *Saṅhāra*, *Bhāsarvajña*, *Vitoka*, *Narasimha*, *Sucaritamīśra* 等の諸論師よりなしているから以上の仏教原典は論理学研究にとって重要となっている。更に又、従来、世親の俱舍

論を反論した正統有部の順正理論に関する研究が少くない現在、又、その漢蔵両本以外にサンスクリット原本の存しない現在、順正理論の作者衆賢の弟子デーバカラの梵文テキスト *Abhidharmadīpa* (ed. P. S. Jaini, 1959) は最も有益な資料の一つである。これは順正理論と一致する所も多く、漢訳の正しい理解に資するのみならず、大乘中観・瑜伽派を明瞭に対論者として出しており、又、インド論理学にも精通した諸批判、更に又、正統有部以外の諸思想の影響も見られる点からして、俱舍論を中心として、北方アビダルマ研究の分野に新しい光をあてた。この論書については、英国から出た筆者の書評がある。(拙稿 *Abhidharmadīpa*, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, University of London, Vol. XXV, 2, 1962)。ただ註の校訂に於て、かなり誤植が見られるのは遺憾である。この新しい論書についての研究はその後、いまだ出ていないが遠からず本格的研究の出版が期待せられる。仏教僧団研究のために重要な次の資料もこの研究所より出されている。即ち *Śrāmaṇeraika*; *Bhikṣuprakīrṇaka*; *Bhikṣuṅṅprakīrṇaka* であり、又、二二三四—二二三六年インドを訪ねた *Dharmasamin* の記録の英訳を完成した。インド政府の仏教に対する熱意は近年とみに重厚を加へたが、研究所への

支援のみでなく、仏教に関する政府直接の出版物も増加しつつある。その一つ *P. V. Bapat* が編集した *2500 Years of Buddhism, 1956* は、世界の諸学者によるインド仏教の哲学と歴史であるが、現在(一九六五年六月)第二版が出され、又、その姉妹篇として出された、美術書 *The Way of the Buddha* は、パーリ、梵語の聖典よりの引用と仏教美術史とを併用し、仏陀の伝記及び仏教美術と印度教美術との関聯をたどったもので、美術・伝記・思想三位一体をモチーフとした新しい試みである。政府は今までの如何なる美術書にも存しない構成であると、筆者にその自信のほどを示していた(一九六四年)。たしかに、この試みは往々、美術書に欠いていた古典文献に対する知識の欠如を補っているばかりでなく、それは宗教と古典の伝統の上で凡てを把へようとする現代インドの文化的欲求のシンボルである如く思われて興味深い。

サンチニータン大学の中国仏教科から数年前、*A. Sastri*, *Karatalaratna*; *P. V. Bapat*, *Arthapadasūtra* が出われ、その出版は、以前として仏教学界を賑はし、近年出された *Gilgit Manuscripts* は有部の *Vinayavastu Samāhita-sūtra* を収めてゐる。カルカッタ大学から *Yogācārabhūmiśāstra* を出し、他方 *Asiatic Society of Bengal* は

Saddharmapundarikaを出している。更に、カルカッタのサンスクリット・カレッジから R. G. Basak, Mahāvastu の第一巻が出された。その他、インドには古典から抜粋したテキスト用各種の出版が相ついでいる。例えば N. Dutt, *Buddha-samgraha* 1962 は、サンスクリット仏典の中、三―四世紀までの重要な仏典四部にわけて集録し、その序文に於て、所引の全経典の略説を与えている。その外、梵巴の原典を問題的に集録したものととして P. L. Vaidya, *Baudhāgamaṁthasamgraha* がある。ハンディットといわれる学者の労作も目立つ。即ち P. Sukhalal, *Hetubindutika* があるが、これはダルマキールティ著書に対する *Arcaita* の註であることは周知の如くである。同様に Malvaniya, *Svāthānūnānapariccheda* (*Dharmakṛiti*) は、ハッタンのマヌスクリプトの校訂である。フサーンのフビダルマローシャのヒンディー語訳も Narendra Deva によつてなされている。バンドルカル研究所からもパーリ原典のデバナガリーが出ている。即ち、今まで出されたものでは *Aṭṭhasālinī*, *Dkammaśāganī*, *Paṭimokkha*, *Cariyāpiṭaka* である。特に *Aṭṭhasālinī* は一般に用いられて来たパーリ協會本とは著しく相違しそれに校訂者ババットの研究も附加された完本であつて、爾後はこのデバナガリー本によらね

ば正しい理解はえられない(拙著「仏教心理学の研究」参照)。近時、デバナガリー本が多く出版されるが、その殆んどはパーリ協會本と変りはない。この点についてインド政府及び関係者の言うところによると、デバナガリー本出版の必要は現在インドに於けるハンディット(学匠)或は一般の中にもローマナイズされたパーリ協會本の読み難い人々がいるためにその便を計ることも考えられていて、必ずしも、異本の発見によるパーリ協會本の学問的校正ではないといふことである。先きのアッタサーリニーはそうした諸経典の中では、それ故に異例であり、従つてこの点に限る限りそのデバナガリー事業の意味もあつたといわねばならぬ。

仏教の地域的研究も、近時見られる新しい方向である。これには J. N. Ganhar, *Buddhism in Kashmir and Ladakh*; *Utara Pradesh Government, Buddhism in Utara Pradesh* がある。仏教に於ける non-Vedic elements を指摘した興味ある研究として G. C. Pandey, *Origins of Buddhism* をあげることが出来る。仏教史家 S. Dutt, *Buddhism and five After-Centuries*, 1967 は仏陀の歴史性と初期大乘に至る歴史を取扱い、彼の旧著 *Early Buddhist Monachism*, 1920 と共に仏教々義にも精通した史家の面

目を伺わしめる好著である。彼は現在、インドと日本文化との交渉史の著作に専念し、その原稿の批判を求められた(一九六四年)が、殆んど出来上っている。大乘原典に関しては V. V. Gokhale⁴⁵ Bhavya, Mādhyamaka-śrdaya の仕事をしている。彼は Bhavya が Tarkajyāla に於てインド哲学史の最初の企てを立てたということに注意している。特に、ユー・カレーは第八章に注意し、ブハビヤがここで六世紀に知られていたシアンカラ以前のヴェダーンタを取扱っていることを指摘していた。インドの学者が一般にとっている仏教とヴェダーンタとの類似の指摘に関する研究も依然として行われている。即ち C. Sharma, *Dialectic in Buddhism and Vedānta* がその傾向を代表している。タントラの最高研究者たる Bhīṭacārya が物故したのは遺憾であるが、この方面に関する研究は他と比較して多く存しない。但し、Heuvajra を研究し、偉れた業績を蔵している少壮学者を知っているが、遠からず、パローダより出版せられるであろう。今は都合により、名を記さず残しておこう。S. B. Dasgupta, *Introduction to Tantric Buddhism* はタントリズムの歴史的位置付と各種のタントリズムを取扱った概論的著作である。R. C. Mitra, *The Decline of Buddhism* は大乘仏教がインド教に撰取せられていった過

程を叙したもので、仏教とヴェダーンタとの比較というインド学界一般の傾向を示すものである。又、インドに於ける現代教育をうけた哲学者の若干は好んで西洋哲学とインド哲学との比較研究を行う。その際、しかし西洋につたわる原典の抜粋の照合が行われる。西洋哲学をそれ自体として深く理解せんとする仕方は教育一般に於て、既になされていぬ。T. R. Murū, *Central Philosophy of Buddhism* もカントとの比較であるが、これはしかしインドに於ける産物として成功したところの現代インドを代表する一つの商品である。特に本書はアメリカに於て読まれている。

インドに於ける仏教研究は政治的制約を脱し、その研究方向は言語学を主とした文献研究と現代の要請に応じた文化的歴史的研究との二方向に向っている。前者の方向については以上略記したことであるが、後者の方向については、やや他のインド学とくらべて、充分な業績がまとめられていない。勿論、例えば、タゴールの批判的文学の研究及び Chao Kuo-Chun がインドで成しとげた経済学に関する諸研究もあるが、主として、古文獻或は欧米人の集めた一資料にもとずいてなされたものが多い。但し、インドの深き伝統からいって、仏教学に關しても、取るべき方法論は第一に言語に關する根本的知識と、第二に諸種のインド文化

圈にまたがる中世・近代の文化史の第一資料にもとづいた研究方法論が、今後期待せられるであろう。

他方、仏教思想史の上で占めているインドに於ける仏教興隆の意味は仏教の合理主義にあつたと考えられる。もしそうだとすれば、後期の大乗仏教に於て発達した神秘主義哲学に対して、インド仏教は学問的にも歴史的にも合理的思惟を中核としていた。而も、この合理的信仰と同時に後に発達した宗教的情操の理解とが深い、ヒューマニズムとなつて歴史の底に流れていた。この合理主義と宗教的情操との二要素がジャイナ教、老荘学、アリストテリアニズムの如き諸思想と共に世界思想史上に貢献したのである。しかし、インド仏教の特色という側から言えば、それは原始仏教を中心とする合理主義にあると言はねばならない。従つて、かかるインド仏教の世界的意味という点からいへば、現代インドに於ける仏教学研究は宗教的情操或は神秘主義的研究の方向をたどらず、むしろ哲学的或は言語学的操作による合理主義的研究方向に進みつつあると考えられる。

四、現代インド社会の研究

現代インドの歴史的研究は、独立後の反植民地的モータীবと同時に、それと期を同じくして擡頭した第一資料

の出版事業と相まって著しく進歩して来た。例えば、J. N. Sarkar の企劃による Poona Residency Correspondence; G. S. Sardesai, Selections from the Peshwa Daftar 或は地域的研究資料たる Records of Fort St. George Series (Madras Record Office) などの第一資料出版である。しかし、その資料にもとづく研究方法は大体、編集の形を脱していない。政治史にしても、同じ傾向が見られることは P. Sitaramayya, History of the Indian National Congress (1947); J. C. Bagal, History of the Indian Association などによって伺える。

現実の歴史的基础付けと共に、他方、その社会学的研究がインド人学者によって積極的に推進せられるに至つた。A. R. Desai, Social Background of Indian Nationalism (1948) はインド中産階級を中心とした社会研究の資料となる。R. P. Dutt, India To-day; J. Mill, History of India は、農村の時代区分に従つた歴史的研究資料を提供して居る。同く、地域的研究では N. K. Majumdar, Justice and Police in Bengal 1765-1773 (1960); B. B. Misra, Judicial Administration of the East India Company; G. Singh, A Short History of the Sikhs (1950); H. R. Gupta, Punjab on the Eve of the First Sikh

War (1956); D. R. Regmi, *Modern Nepal* (1961); J. Roy, *History of Manipur* (1958) 等が数多く出版された。又、伝統の新しい社会的変化への対応性の問題は特にインドに於ける関心の甚だであり、これにこたへて K. N. Venkatrayappa, *A Socio-Economical Study* (1957); M. S. A. Rao, *Social Change in Malabar*; A. Boppanage, *A Study in Urban Sociology* (1957); K. Datta, *Survey of India's Social Life and Economic Condition in the Eighteenth Century* (1961) があり、特にトライプの研究はインド人独自の研究を俟つところが多い分野であるにかかわらず、この方面に関する研究は少くなく、却つて欧米に多い。

インドの社会学的研究は文化・地理・言語・民族等の異種性によって、極めて困難であり、個人的現地レポートのみでは社会学的現実性を欠き、又、インド社会学は極めて多く、その文化的背景と密接しているから、文化的背景の知識なくして科学としての社会学のみではインド社会のコンプレックスを把えがたい。到るところに、見出すことはインドに於て社会学的方法論でとらえられた社会は社会一般ではなくして、社会の一部に過ぎない。換言すれば、インドに於ける社会学は実は *culturology* の一つのブランチ

に過ぎない如くに考えられる。それ故に、一体インドに於て社会学は可能であるかという問題が欧米の社会学者の間にも取り上げられたりしているのを見る (*Contributions to Indian Sociology*, No. iii 1959, the Hague)。

ただ、おしむべきことはインド社会研究が欧米に於て盛んであるにも拘らず、本国に於ては然らず、却つて政治史と歴史に重点がおかれていて、現代社会の体系的研究の多くないことである。第二十六回国際東洋学者会議に於ても十四部門が分けられながら社会学研究は独立した部門とならず、現代及び中世史部門で関説せられた。時代の要求と新しいインド自体の方向として今後、インド社会研究が独立した部門となることが望まれる。

五、主要研究所及び所属資料数

インド学に関する大学・研究所は全インドで総数三百五十数種存在するが、これによつてもインドに於ける東洋学研究の隆盛を知りうるであろう。今はその中、特に重要なマヌクリップトを有する四十一の研究所をえらんで資料調査の便に供したい。

1. Oriental Institute, P. B. No. 75, Baroda. 23,161 mss.; 25,100 books; 240 periodicals.

2. Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona-4. 23, 146 books; 150 periodicals; 23, 000 mss. in Sanskrit and Prakrit.
3. Andhra Historical Research Society, Rajahmundry. 11,100 books in Skt. and Telugu; some of mss.
4. Sanskrit Academy, Osmania University, Hyderabad. 1072 books; 3,000 mss.
5. State Archives, Irram Manzil, Hyderabad. 8,073; periodicals, 2,524; records, mss, 859.
6. Department of Historical and Antiquarian Studies in Assam, Gauhati. 5,000 books; 500 periodicals; 3,000 mss.
7. Bihar Research Society, Museum Buildings, Patna. Has published 19 books, Buchanan's Journals, 4 vols, historical records.
8. Department of Ancient Indian History and Archaeology, Patna 5. 3,075 books.
9. Department of History, Patna University, Patna 5. 8,000 books, 36 periodicals; 1,612 mss. in Persian, 983 in Sanskrit, 59 in Hindi.
10. Jaina Siddhanta Bhavana, Arrah. 5,688 mss. in Sanskrit and Prakrit.
11. K. P. Jayaswal Research Institute, Museum Buildings, Patna. Tibetan Buddhist mss; Skt. mss. 705; Persian mss. 99.
12. Mithila Institute of Postgraduate Studies and Research in Sanskrit Learning, Darbhanga. 7,300 books; 4,000 periodicals; 5,000 mss. in Skt.
13. Nava Nalanda Mahavihar, Nalanda. 23,634 books, 321 Tibetan Xylographs, 152 mss.
14. Research Institute of Prakrit, Jainology and Ahimsa. 5,800 books.
15. Archaeological Survey of India, Janpath, New Delhi-11. 50,000 volumes including periodicals.
16. Bharatiya Vidya Samsthāna (Institute of Indology), 88, Lucknow Road, Timarpur, Delhi 1,990 books.
17. Department of Buddhist Studies, University of Delhi, Delhi-6. Editions of Buddhist texts.
18. Department of Sanskrit, University of Delhi, Delhi-6.
19. Indian Council for Cultural Relations, Azad Bhavan, Indra Prastha Estate, New Delhi-1.

(佐々木)

19

- 28 20. International Academy of Indian Culture, J 22, Hauz Khas Enclave, New Delhi-16. mss. in Devanāgarī and from Far-East.
- (木々々) 21. National Archives, Janpath, New Delhi. 1,90,000 books and periodicals. Archives : 1,03,625; 51,13,000 documents : 11,500 mss.; 4,150 printed maps; 1,38,298 microfilms of records.
22. Sahitya Akademi, Rabindra Bhavan, 35, Ferozeshah Road, New Delhi-1. 20,000 books.
23. Gujarat Vidya Sabha, Ahmedad. mss. 5,000.
24. Research and Publication Department, Jammu and Kashmir Government, Srinar. Special field : Kashmir Śaivism.
25. Oriental Manuscripts Library, Kerala University, Trivandrum. 30,000 mss. 7087 books; 3,537 periodicals.
26. Adyar Library and Research Centre, Adyar, Madras
20. 1,00,000 books; 40,000 mass. mostly Skt (a few Tibetan mss.).
27. Government Oriental Manuscripts Library, University Buildings, Chepauk, Madras-5. 34,044 mss; 3,044 mss; 3,067 books.
28. Asiatic Society of Bombay, Town Hall, Bombay-1. 1,50,000 books; 30,000 vols of copyright collection.
29. Deccan College Postgraduate and Research Institute, Poona-6. 75,000 books; 515 periodicals; 10,000 mss.
30. Kaivalyadharm, Lonaula P. O. Conducts clinical research on Yoga. Some of mss. Conducts Ishwardas Chhumial Yogic Health Centre in Bombay (43, Netaji Subash Bose Road, Bombay-2).
31. Kannada Research Institute, Dharwar. 7,126 books; 76 periodicals; 2,542 mss. in Kannada, Sanskrit, Marathi and Telugu.
32. Sadasiva Sanskrit College, Dolmandap Sahi, Puri. 6,222 books; 5 periodicals; 500 mss.
33. French Institute of Indology, Pondicherry. 15,000 books. Special interest in Śaivāgama, Iconography, and Lexicon of Ancient Tamil.
34. Rajasthan State Archives, General Records Building, Bikaner. 49,000 books; 24,000 documents; 14,000 mss; 1000 paintings.
35. Banaras Hindu University, Banaras. 2,72,097 books; 37,407 periodicals; 4,872 mss. in Prakrit, Sankrit,

Hindi, Bengali, etc.

36. Nagari Pracharini Sabha, Varanasi. 50,000 books ; 200 periodicals ; 10,000 mss.
37. Anthropological Survey of India, Indian Museum, 27, Chouringhee Road, Calcutta-13. 21,000 books, 6,000 periodicals, 4,500 maps.
38. Asiatic Society of Bengal, 1, Park Street, Calcutta-16. 11,379 Skt. mss.
39. Calcutta Sanskrit College, Calcutta. 9,000 mss. Has a museum with 500 antiquities.
40. National Library of India, Belvedere, Alipore, Calcutta-27. 11,17,800 books ; 61,846 periodicals ; 2,548 mss. in Skt, Arabic and Persian.
41. Visvabharati University, Santiniketan. 5,607 mss. in Bengali, 3,378 in Skt, 356 in Tibetan and 400 in Oriya ; 1,94,000 books ; 6,805 periodicals.

六、主な学術雑誌及び所属機関

三百六十種の雑誌の中七十五種のみを詳述し、その記録を
しるす。

1. Gairvāṇī Samskrita Bhasha Pracharini Sabha, Chit-

toor.

2. Journal of the Assam Research Society, Kamrupa Anusandhan Samiti, Gauhati.
3. Journal of Bihar Research Society, Bihar Research Society, Bihar Research Society, Patna.
4. Jaina Siddhānta Bhāshara, Jaina Siddhānta Bhavana, Ārrah.
5. Saṃskṛta Ratnākara, Akhīla Bhāratīya Saṃskṛta Sahitya Sammelana, Delhi.
6. Epigraphia Indica, Archaeological Survey of India, New Delhi.
7. The Indo-Asian Culture, Indian Council for Cultural Relations, New Delhi.
8. India Quarterly, Indian Council of World Affairs, New Delhi.
9. Indian Literature, Sahitya Akademi, New Delhi.
10. Buddhiprakash, Gujarat Vernacular Society, Ahmedabad.
11. Journal of the Oriental Institute, Oriental Institute, Baroda.
12. Journal of the Saurashtra Saṃśodhana Maṇḍala,

Baroda.

12. Journal of the Saurashtra Saṃśodhana Maṇḍala,

- Saurashtra Research Society, Rajkot.
13. Sāradāpīṭha-pradīpa, Shree Dwarakadheesit Sanskrit Academy and Indological Research Institute, Daraka.
14. Kashmir Research Bi-annual, Research and Publication Department, Jammu and Kashmir Government, Srinagar.
15. Madhya Bharati, Bulletin of the Institute of Language and Research, Jabalpur University, Jabalpur.
16. Brahmavidyā (AdyarLibrary Bulletin), Adyar.
17. Transactions of the Arch. Soc. of S. I., Archaeological Society of South India, Madras.
18. Bulletin, Government Oriental Manuscripts Library, Madras.
19. Bulletin, Institute of Traditional Cultures of South East Asia, Madras.
20. Journal of Oriental Research, Kuppuswami Sastri Research Institute, Mylapore.
21. Samskrita Ranga Annual, Samskrita Ranga, Madras.
22. Journal of the Tanjore Sarasvati Mahal Library, The Tanjore Maharaja Serfoji's Sarasvati Mahal Library, Tanjore.
23. Theosophist, Theosophical Society, Adyar, Madras.
24. Annals of Oriental Research of University of Madras, Madras.
25. Journal of the Asiatic Society, Bombay.
26. Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona.
27. Bulletin of the Deccan College Research Institute, Poona.
28. Vāk, Deccan College, Poona.
29. Forbes Gujarati Sabha Trainasik, Forbes Gujarati Sabha, Bombay.
30. Journal of the Gujarat Research Society, Bombay.
31. Yoga Mināṁsā, Kaivalyadhama, Lonavla.
32. Maharashtra Sāhitya Patrikā, Maharashtra Sahitya Parishad, Poona.
33. Poona Orientalist, Oriental Book Agency, Poona.
34. Bhavivavya, Samskrita Bhāṣā Pracāriṇī Sabhā, Nagpur.
35. Half-Yearly Journal of the Mysore University, Mysore.
36. Karnatak Historical Review, Karnatak Historical

- Research Society, Dharwar.
37. Quarterly Journal of the Mythic Society, Bangalore.
 38. Orissa Historical Research Journal, Bhubaneswar.
 39. Advent, Aurobinko Ashram, Pondicherry.
 40. Jñānodaya and Bhārāṭya Jñānapīṭha Patrikā, Varanasi.
 41. Bhārati, Banaras.
 42. Darululūm, Deobond P. O., Saharapur District.
 43. Journal of the Ganganatha Jha Research Institute, Allahabad.
 44. Gurukul Patrikā, Haridwar.
 45. Indian Philosophy and Culture, Vaindaban.
 46. Nāgarī Pracārīnī Patrikā, Varanasi.
 47. Sanskrit Association Bulletin, Allahabad.
 48. Journal of the U. P. Historical Society, Lucknow.
 49. Bulletin of the Anthropological Survey of India, Calcutta.
 50. Asiatic Researches; Journal of the Asiatic Society of Bengal; Memoirs of the Asiatic Society of Bengal, Calcutta.
 51. Our Heritage, Calcutta Sanskrit College, Calcutta.
 52. Indian Culture, Calcutta.
 53. Journal of the Indian Society of Oriental Art, Calcutta.
 54. Prācyasāṣī, Prācyā Vaṅī, Calcutta.
 55. Prajñā, Vangīya Sanskrita Siksha Parishat, Calcutta.
 56. The Visvabharati Quarterly; The Visvabharati Annals, Santiniketan.

(I wish to express my sincere thanks to the authors of the survey-articles contributed to the "Oriental Studies in India" edited by R. N. Dandekar and V. Raghavan on the occasion of the 26th International Congress of Orientalists, New Delhi, 1964.)